

今回は私の番♡

どうしようもない

ヘンタイね！



ロリツンメイドと始めるH生活





「ほら……どうなの、バルス？」

「うん……？」

「うん……？ じゃないわよ……」

「そんなに固くして気持ちいいの？」

「トキ」

「トキ」



「足でしーがかれて感じるなんて」

「まったくぐどいっしょようもない変態ね」

「ああ。気持ちいい、せ」

「なんだか凄くビクンビクンしててるわよ。」

変態さんはもうういきそっうなのかしらっ?」

「うっ、っ、っ……気持ちよすぎんごだよね」

「ほっ、っ、っ……もうういそっうなのかしらっ?」

エロエロ

「くそ。我慢できねえ……」

だ、だ、だ……ラムっー」

「あはッ。バルスの分際で」んならぶちまけて

……ぶっしゅっももない変態ね」









「なぜ」の私がバルスの粗末なものに

奉仕しないといけなのかしらね」

「しょうがないだろ。足コキだけじゃ満足できねエエ」

ぽっぽっ

「あれだけ出したのにまだ「こんなに固いし。

まったくもどいてるのやら」

「俺っちの溢れる若さと煩惱が全開みたいなの？」

「フン、無駄口たたいていそその舌、切り落とすわよ」

「はっおっ、もう我慢できねー。

スバル発射します!!!」

「ちよつと待ちな

ッ!

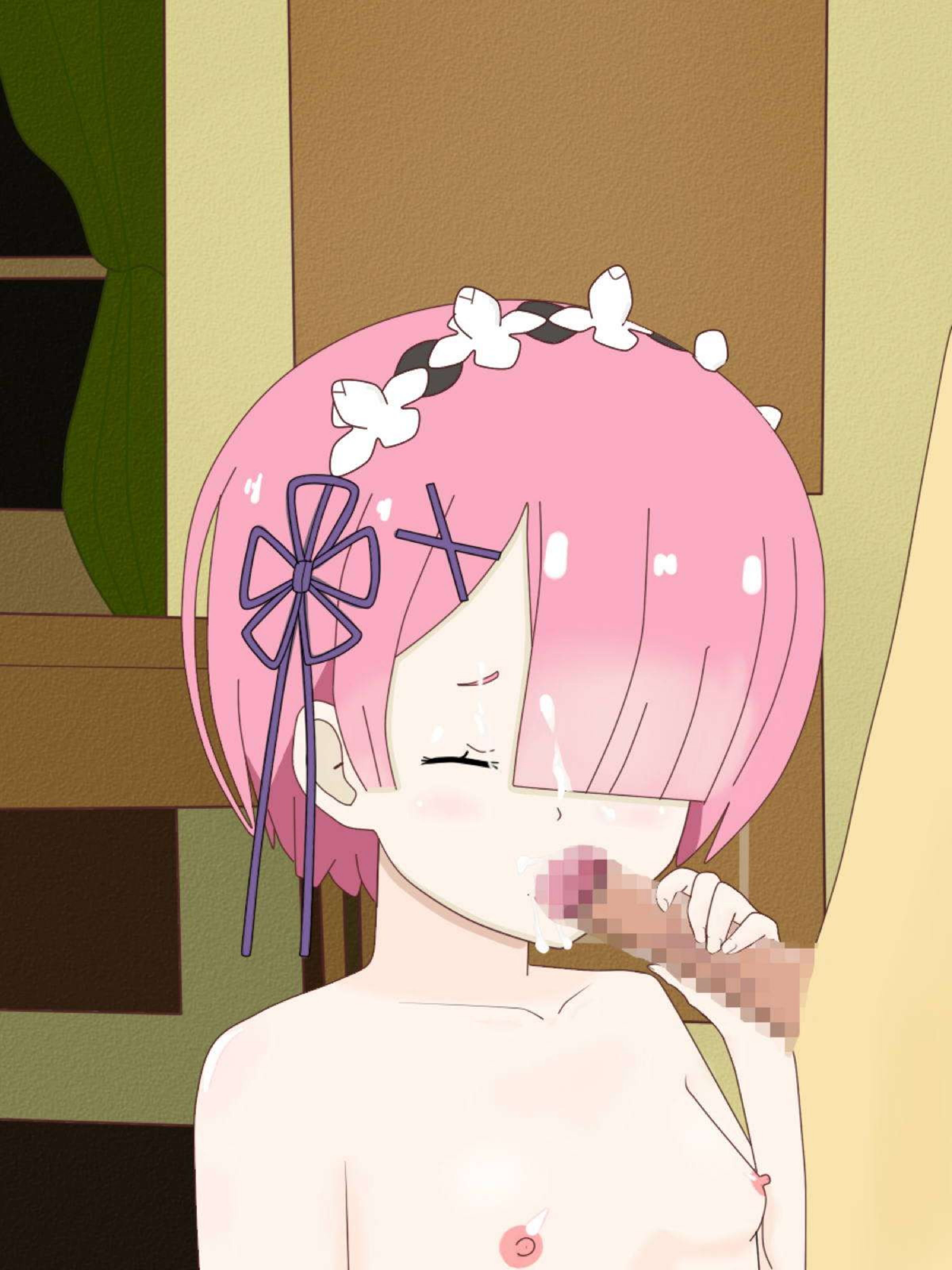
「キヤツ、」の馬鹿。無能。最低。

汚いものを顔にぶっかけないでよー!

「す、すまん。でも、すげエ気持ちよかったぜ」

「そんな風に褒められても嬉しくないわ、馬鹿」











「あんなおっぱいでいいよ見なしてでもおっぱい見えるか？」

「あんなおっぱいが犯罪者みたいよ」

「いんせーよー！　おっぱい悪いのは元からだ」

くぽんぽん

「それにしても私なんか見て楽しいの？」

「ああ、楽しいね。きれいだから見惚れてんだよ」

「そっつ？　でも私は……その、胸が小さいわ」

「大丈夫。女の価値は胸では計れねエよ」

「ババラス……もっくと優しく触りなすのら」

「お、なん……フライン」

「あちす」

「どうだ？ 気持ちいい」

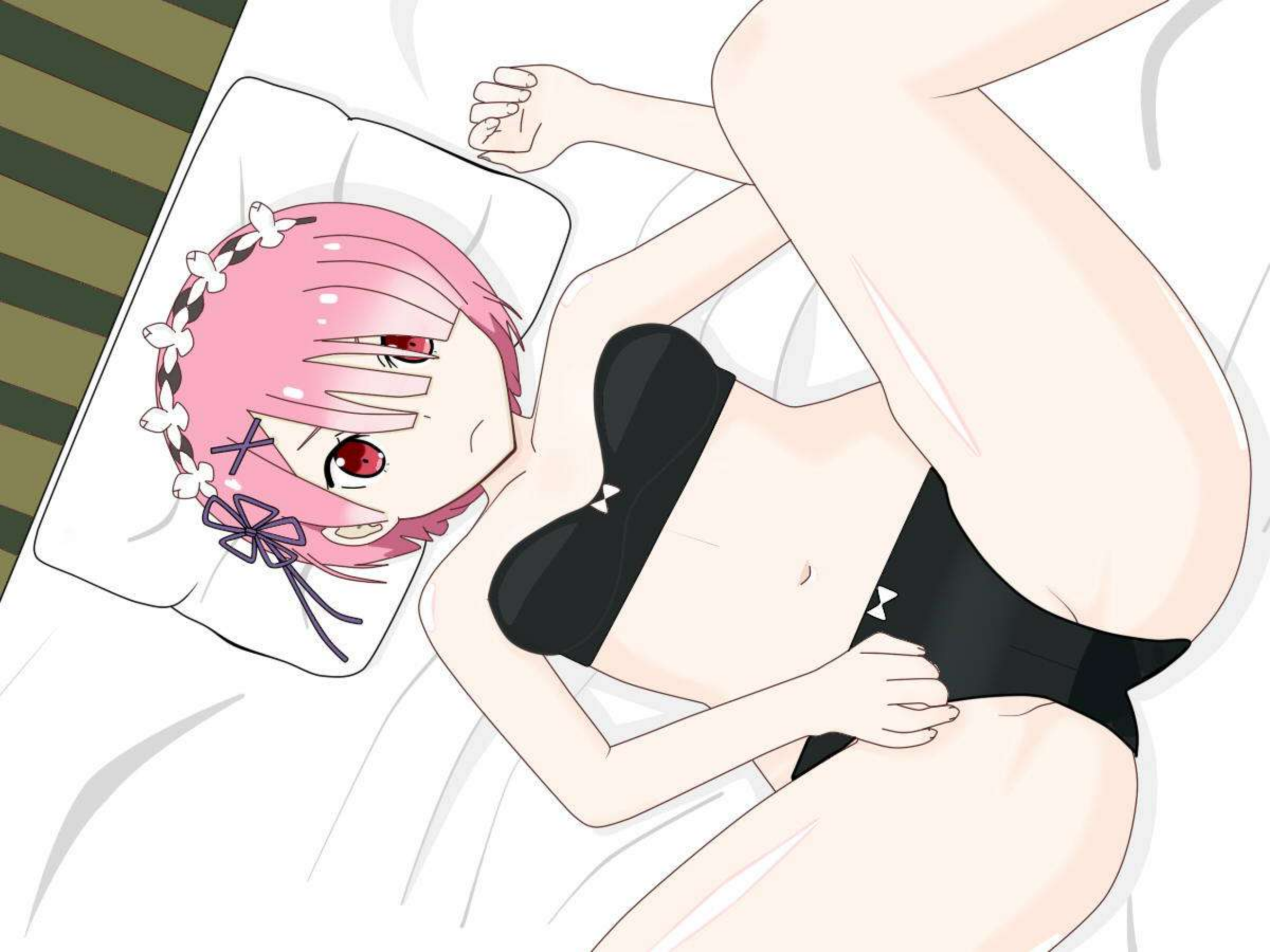
「へー、たーね」

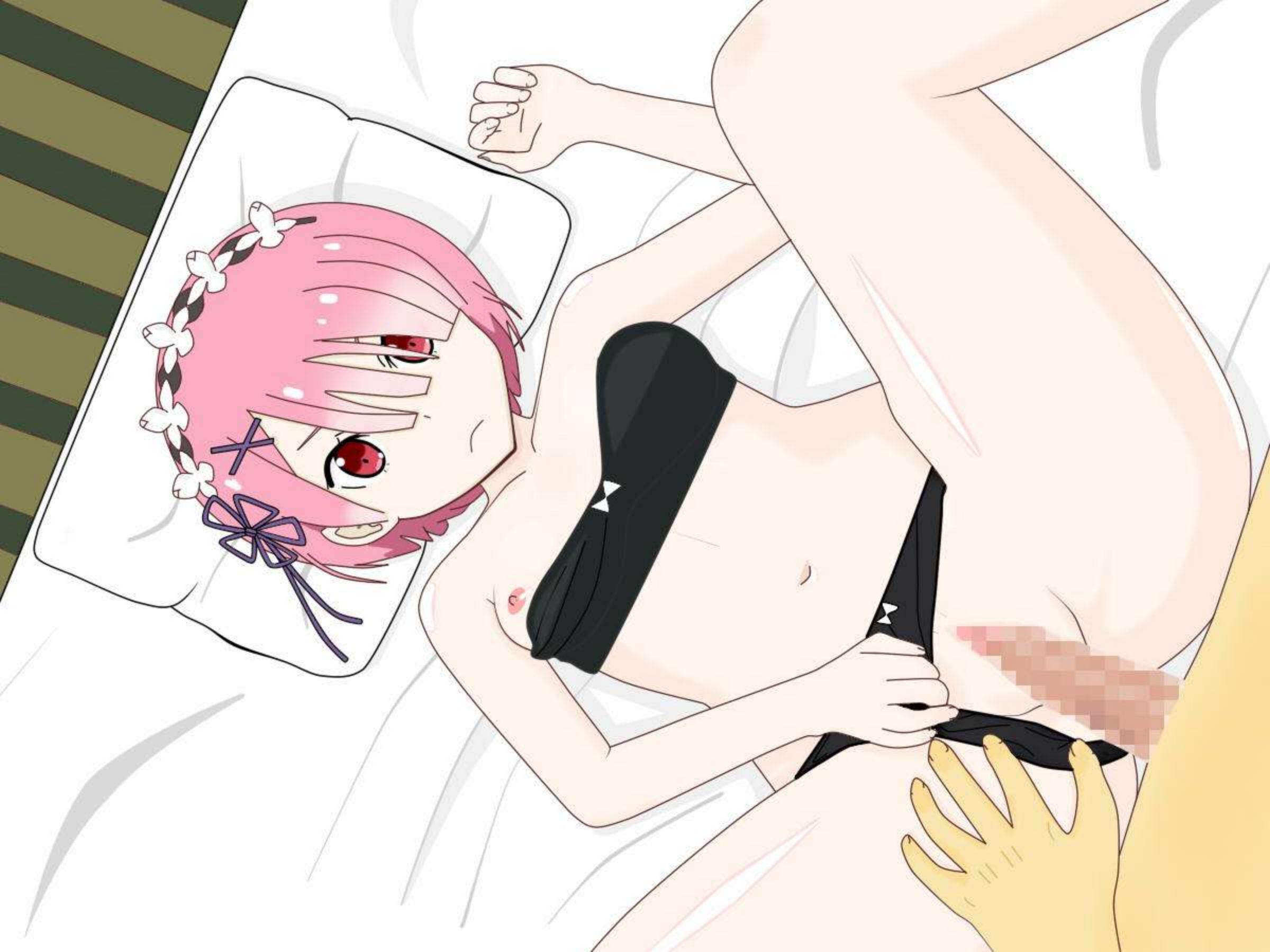
「その言いは濡れちゃったよな」

「あ、っ、ババラスのくせに生意気よ」









「もう我慢できねエ。
いれてもいいよな？」

「こらえ性がないのね、もう。
好きにすればいいわ」

いーいーいーいー

「それじゃ、うおっ！

すげエ気持ちいい。ラムちゃん最高！」

「ケド、申に出したりしたら許さないわよ？」

「す、すげえよ、ラム！
チ×ポがめっちゃ締めつけられる！」

「あんっ、だ、黙りなさいワルス。
そんなに激しく突いたら……いやあっ」

「んんん」

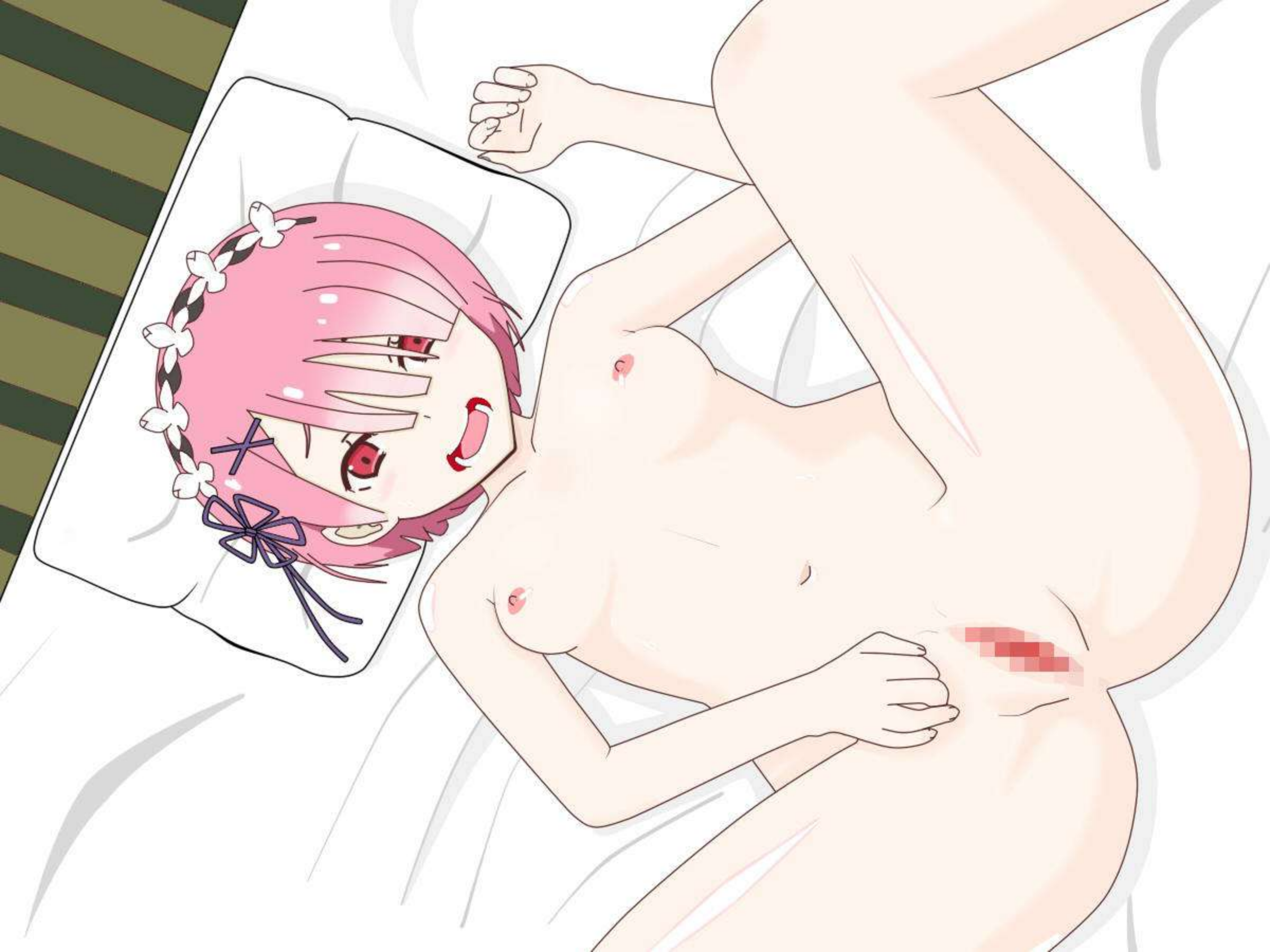
「うおっ。で、でそう！」

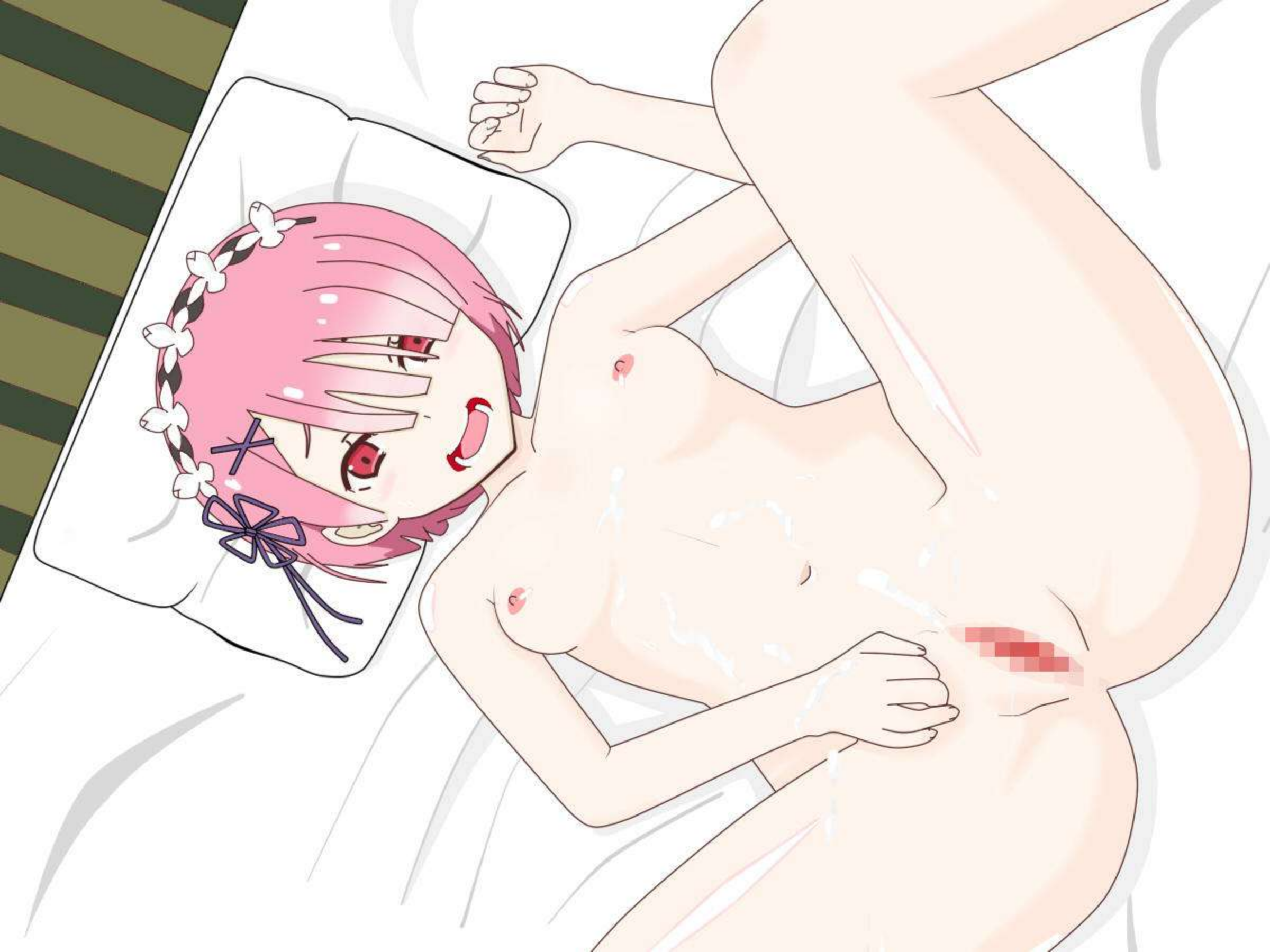
「申はっ、……申はダメよお、あっあっあんっ！」

「わ、わかってる。んお、でる——！！」











「お、おい……いきなり押し倒すなよ」

「バルスは十分楽しんだのよね？」

「今度は私の番よ、フフッ」

ズキズキ
ズキズキ

「流石にもう無理だよ」と

「そうかしら？」

もう「んなに固くなってるじゃあな」

「ええい、そんな言っただったら、」

「男スバルどいまでもお供するわー」



